

## 監訳者まえがき

小此木啓吾

少しでもより速く、より多くの情報を得たい。少しでもより多くの利潤をあげたい。よりよいものを次々に限りなく手にしたい。よりよい自己の身体と生命を所有したいという衝動が高齢社会を生み、よりよい自己の所有を求める欲望が自己愛人間社会をつくり出す。この衝動が他のすべての人間的なものを越えて人々を駆り立てる。それは、限りなく肥大化し、全人間的な幸せも自分らしさも押し殺してしまう。いま、私たちは、まさにこの衝動によつてフロムの言う自己疎外に陥つてゐる。

本書は、この現代の精神状況の到来に予言的な危機感を抱いたフロムが残したわれわれへの遺稿であり、自己存在の覚醒を促す警告の書である。

かつてフロムは、現代のテクノロジー社会の至上原理として、①技術的に可能なものは何でもいいから実現しなければならない、②すべての行動の基準は最高の効率で最大の生産性を發揮する、の二つをあげ、その圧倒的なパワーが人間の心に及ぼす影響を説いた。このテクノロジー社会に適応しなければならない人間はすべて所有——消費人間になる。より多くを購買し、

より多くを消費することがすべての人間である。彼らは、次々に提供される目新しい商品をひたすら消費していく。この強いられた受身性は、やがて人間らしい能動性、批判的な思考能力、人との愛の関わりの喪失をもたらし、人々に無力感、孤独感、不安、倦怠を引き起こす。そして、産業が押しつけるままにテレビ、コンピューター、スポーツ、イベントによつて倦怠をまぎらわそうとするが、ますますそれは無気力な同調性をつくり出す。やがては、よりよい自分を持つこと（自己愛）の欲望を満たすことをひたすら求め、人との関わりからひきこもり、コンピューター・インターネットへの閉じこもりを招き、その結果、すべてが情報化されてプライバシーを失い、誰もが主体性を失つた操作される人間になっていく（『希望の革命』一九七〇）。このフロムの批判的な予言は、いま私たちにますます身近なものになつた。しかも、それにもかかわらず私たちは、この身の上に漠然と気づきながらも、その混迷からどう脱出してよいかわからない。

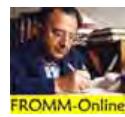
そしてフロムは、このような持つこと、消費することをひたすら求める人間のあり方に対して、より創造的、生産的な自己感を抱き、理性的に思考し、人との愛に生きる生き方、自己の能力を能動的に發揮し、主体としての自己を実感し確信できる生き方の回復の道を探り、「持つこと」の様態に対峙する「在ること」（being）の様態を提起する。

実は、それぞれの時代・社会における社会的性格を批判的に認識し、その批判を通して人間

主義的な主体性を回復する方法を説く作業の積み重ねがフロムのライフワークであった。

若きフロムはかつて、フランクフルトを中心としたフロイト左派と呼ばれる革新的な社会思想の担い手であった。それは、フロイトとマルクスの統合を介して現代資本主義社会の批判的分析を行うとともに、回復すべき主体のあり方についての指針をフロイトの人間理解に求めた。ホルクハイマー、マルクーゼ、フロム、アドルノなどのフランクフルト学派が形成されたが、やがてフロムは米国に亡命し、そこでさらに精神分析の臨床に社会文化的視点を導入したカレン・ホーナイ、フロム＝ライクマン、サリバンなどとともに、いわゆるネオフロイト派を形成した。

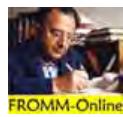
私たち世代にとつてフロムとの最初の出会いは、この社会的性格論の手法の原点となつたあの有名な『自由からの逃走』（一九四一）だった。近代社会では個人の自由と孤独が意識的には自明のものになつたが、無意識的には中世以来の権威主義的なマゾヒズム的依存が根強く存続し、人々は自立への不安と権威への憧憬による権威への献身を求め、この権威主義的な心性が大衆のファシズム化への温床となつた、という。このファシズム心理の分析に私たちの世代は、戦後の自分たちの自己認識にとつて決定的とも言えるほどの感銘を受けた。そしてこの手法は『希望の革命』（一九七〇）における現代テクノロジー社会への批判となり、やがて、『生きるとすること』（一九七六）、そして本書で説かれる「持つということ」と「在るということ」とい



う二つの人間の様態の分析に立脚した現代社会の人間の心に対する批判的な予言者としての認識と警告へと発展したのである。

しかし、フロムのもう一つの歩みがある。それは、フロイトとの出会いによって得たフロイト理解にその基礎を置く人間の主体性回復の方法を探求することである。フロムによれば、フロイトの精神分析は西洋のヒューマニズムと合理主義の頂点を意味する思想史的な営みである。知性によって無意識的情念を支配することを目指し、自己洞察による自己統制の道を示した。自分自身を知ることによって自己変革することこそがフロイトの精神分析の目標であった。しかも、フロイトは、一人の人間を一年、三年と長期にわたって分析したように、それは、個人尊重という点で現代のモノ的な尺度を越えた人間の最良の状態 (well-being) を究極のものとして追及した。

実はフロイトは、精神医学的な神経症の治療という装いをはるかに越えた哲学的倫理的目標に目を向けていたのだ。精神分析は病気の治療法として始まったが、単に病気がない状態を目指すだけではなく、次第に、よりよく生きる最良の状態 (well-being) の実現を目指す心理的な方法へと移行していったのだ。そしてこのフロイトが開拓した道を受け継ぎ發展させるのが、フロムの言うヒューマニズム的精神分析である。この意味での精神分析が目指すものは、フロムが【精神分析と宗教】（一九五〇）で明らかにした人間主義的な宗教の目標と一致する。たと



えばそれは、鈴木大拙などに見られる禅仏教の目指すところとも多くの一致点があるとフロムは言う。そして、この人間の主体性に関するヒューマニズム的見地が、実は彼の社会的・性格論の批判的な機能の主体的基盤をなしている。

なぜ、前著『生きるということ』に引き続いで本書『よりよく生きるということ』が刊行されねばならなかつたのか。その理由は、いま述べたフロムのヒューマニズム的精神分析の歩みの発展上に本書を位置づけることによつて明らかになる。実は、『生きるということ』を執筆当時、フロムはすでに本書の原稿を書いていたという。しかし、前著ではむしろ、持つ様態をつくり出す産業社会の現実の変革を思考する著作としてそれを位置づけ、本書によつてむしろその社会の中で生きる私たちの存在への様態を、個々人が主体的にどのように回復し実現するかを説く著作として意義づけようとしたのである。

それだけに本書の原題が「存在の技 (The Art of Being)」と名付けられているのは、まさによりよく生きること、最良の状態へ向かうために個々人がどのような心的な方法を用い、かつ体験することが可能かに力点が置かれているためである。そこでは、この種の心的なニーズそのものをさらに商品化したまやかしの、努力なし苦痛なしの気楽なストレス解消や自己啓発産業などに厳しい批判を加えた上で、存在の様態への本もののステップを明らかにする。

そこでは、気づきや瞑想などの真摯な「行」も説かれているが、フロムがここで最終的に勧

めているのは、彼の言う「セラピー超越的な精神分析」である。かねてから追及してきたフロムのヒューマニズム的精神分析は、ここで、彼の言う「セラピー超越的な精神分析」という究極的な形に結晶化された。

すでに述べたように、それは、單なる神經症的な治療を越えた、もつと本質的な人間の心の自己洞察と、人間性の実現を限りなく求める精神分析である。しかも、抽象的な理念としてだけではなくて、本書ではその実践の方法が説かれている。たとえば、最初十回ぐらい分析家との間で「抵抗」についての実感を持ち、精神分析的な自己洞察の方法のモデルを身につけた上で、あとは具体的に自由連想や夢などの自己分析を介して実践していく自己分析の方法がとても具体的に説かれている。

たしかにフロムの言うように、ある意味でフロイトの精神分析は、フリースという親友との間の二八四通による書簡に描き出された夢や幼児期体験の回想に関する自己分析（一八九六—一九〇〇）によって創始されたのであるが、この自己分析の方法を被分析者との間で体験し直し、それが伝承されたのがいわゆる精神分析治療であり、その核心部分の自己分析の術を、精神医学や臨床心理学の枠を越えた、より多くのより広い人々が、セラピー超越的な精神分析という形で主体的に体験し、実践する方法をフロムは説くのである。

この件については、分析者と被分析者の関係性による精神分析治療のわが国における代表者

というべき私も、ここでフロムの勧めるセラピー超越論的精神分析にはそれなりの独自の意義があるとも考える。あえて但し書をつけるなら、あくまでもそれは、よりよい最良の状態を目指す営みとしてであって、もしも治療としての精神分析（心理療法）が必要かどうかが疑われるときには、一応は精神医学的な診断によるチェックを経た上でそれを行つてほしいと思う。

フロイト自身もみずから体験に言及して自己分析の意義を説いている場合もあるが、分析者による治療法としての精神分析を確立するとともに、その必要性を説くことのほうが優先されるようになつたきらいがある。そもそも自己分析のすすめは、K・ホーナイとの関わりがフロムに影響していると思う。なぜならば、フロイト以後の精神分析家の中で、『自己分析』という著作まで著して最も系統的にその意義を説いた精神分析家はホーナイだからだ。そして、米国でフロム＝ライクマンと別れたあと、フロムにとつてホーナイはある時期、最愛の人であった。

終わりに、人間フロムへの私の思いに一言触れると、本書が口カルノで書かれたことを知つて、私には何かホツとした気持ちがある。若いころのあこがれのヒーローだったフロムの晩年が、どんなだったか知りたいと思つていたからだ。ところが、フロムは晩年、口カルノで暮らし、本書を著したという。実は私には口カルノという地に特別な親近感がある。私はマッターホルンが好きで、しばしばツェルマットに滞在する。その帰路、スイスのイタリア

側に下ることがある。とりわけドモモソーラからロカルノまでの地方電車の雰囲気がとても好きだ。イタリア側に来ると風光がガラリと明るく変わる。穏やかで、暖かい陽光の風土になる。そして、この風土の中、湖のほとりの静かな町ロカルノは、フロムがこの本を執筆するのにとてもふさわしい環境だったと思う。そんなふうに、この地におけるフロムの晩年の境地を察して私の心も安らぐのである。

いま、二十一世紀を迎える現代社会は、持つことの様態に駆り立てられ、ますます異様な自己疎外の様相を呈している。それだけにわが国の読者各位が本書によるフロムとの出会いによる自己洞察を通して、よりよく生きることの指標を発見なさることを期待する。

終わりに、すぐれた訳業によつて日本の読者に、フロムとの出会いの貴重な機会を作られた訳者・堀江宗正氏に心からの敬意を表します。

二〇〇〇年一月